2006年5月17日　読売新聞　夕刊

墓石の墓場

薄暗い森に入ると、樹間を埋め尽くす石の群れに行き当たった。京都の山あい。石の表面には家名が刻まれている。ここは、まるで墓石の墓場だ。

昭和30年代、高度成長下の核家族化で、新しい墓が増えていった。加工しやすく、値段も手ごろな石材が主流。半世紀近くを経て、柔らかい石は欠けたり、ひびが入ったりした。

そんな墓が今、建て替え期を迎えた。加えて都市部の墓地不足で無縁墓の整理が進む。不要になった古墓石の行き先の一つが、人知れぬ山中なのだ。

石材業者で作る「全国優良石材店の会」（東京・品川区）の山崎正子事務局長は「古墓石は供養の後、家名を削り、粉砕して埋め立てるのが普通」と言う。

実際は、粉砕には費用がかかる。古墓石の扱いは法律に規定はないが、宗派、寺によって決まり事があるなど多少の煩わしさを嫌い、処理業者が引き取らない場合も多い。「コンクリート代わりに河川の護岸に使えば」「ご先祖さまを自然に帰せるのでは」。どう処理するか。山崎さんのみならず、頭の痛いところだ。

東京・青梅市の吉川石材店では、切断機の回転刃が、鋭い音をたてて古墓石の家名を切り取っていた。「国産の良石なのにもったいない」と経営者の吉川博さん(45)がつぶやく。

不要になったとは言え、一度は霊の宿った墓石に新たな家名を刻むのは、はばかられる。だが、同じ家の墓の台座、花立てや香炉などに作り直すのは許されるのではないか。「石が好きだから」と始めたリサイクルは、全国的にも珍しい試みという。

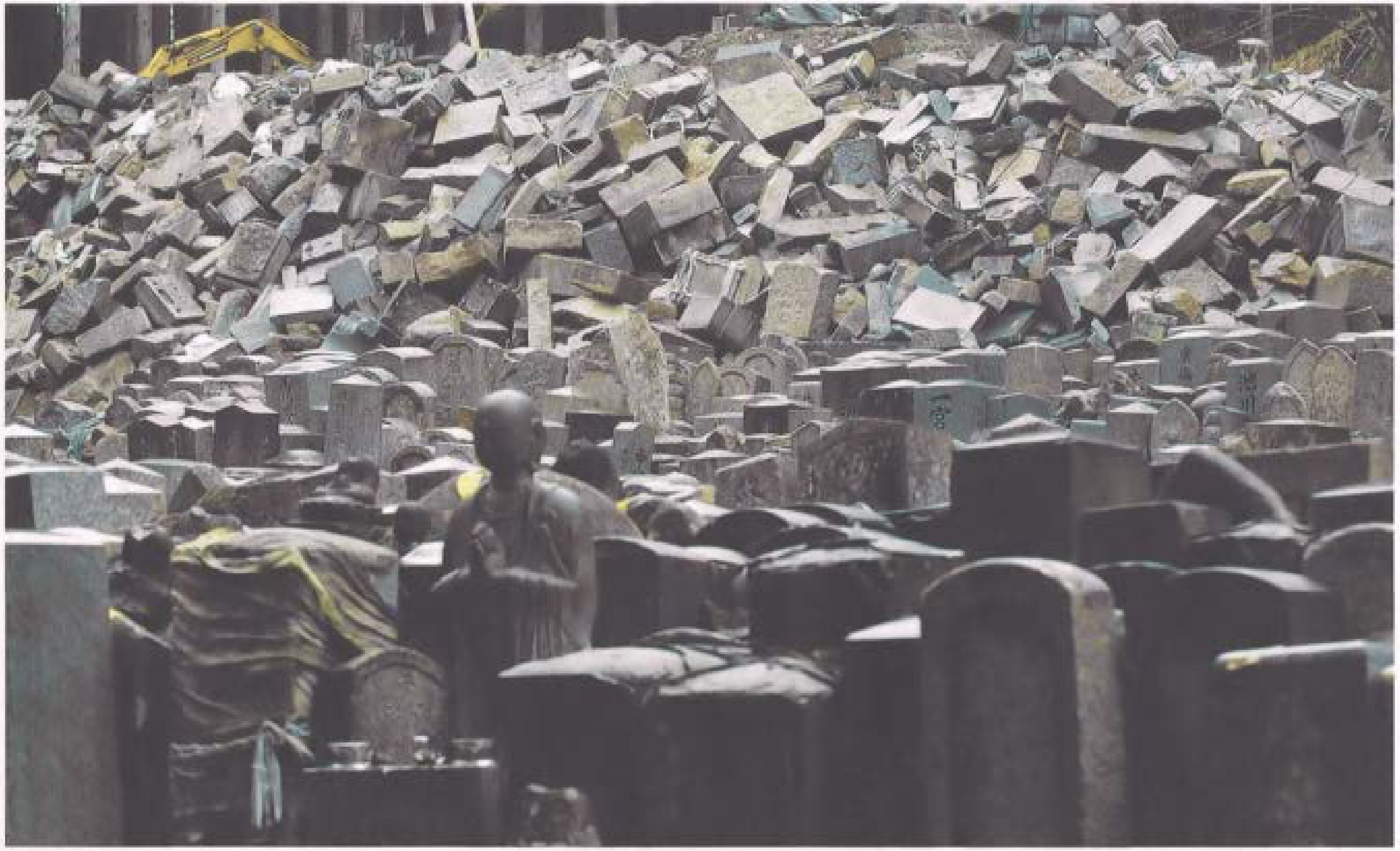
少子化で夫婦一代限りの墓も現れた。今後も確実に古墓石は数を増し、その対策が問題となる。

自分の山を置き場にした京都の石材業者は「管理料を支払い、檀家の減少に悩む過疎地の寺に引き取ってもらってはどうか」と話す。海で魚礁に、との案もあるという。

海ゆかば、山ゆかば……。

カメラとペン・小西太郎

階段状に土地を整備し、有料で古墓石を引き取っている業者（香川県高松市の有限会社大新で）



「そのまま捨てるのは気がひける」と、石材業者が山中に安置している古墓石。大量に積み上げられた台座などの手前には本体部分や石像が整然と並べられている。関係者を招いた供養も定期的に行われているという（京都府で）

墓地に対する考えも多様化し、樹木葬などの合葬墓への関心も高まっている（東京・町田市の町田いずみ浄苑で）

家名を切り取られた古墓石は、香炉などに生まれ変わる（東京・青梅市の有限会社吉川石材店で）

ズームアップ

毎週水曜日掲載　WEEKLY

ヨミウリ・オンラインのズームアップはhttp://www.yomiuri.co.jp/zoomup/